二〇一一年十二月　山陰研究　第四号　抜刷
島根大学法文学部　山陰研究センター

翻刻『出雲名勝摘要』

要木純一

【資料紹介】

翻刻『出雲名勝摘要』

要木純一
（島根大学法文学部）

摘　要

『出雲名勝摘要』（島根大学附属図書館蔵）は、出雲地方の名勝について、漢学者・教育者星野文淑が由緒をのべ、漢詩・和歌・俳諧を配したものである。当時の出雲文壇の状況、神話伝承、観光、風俗を知る上で重要な資料であるので、ここに翻刻を試みた。

キーワード：出雲名勝摘要、星野文淑、観光、明治初期、漢詩

はじめに

明治十年代、維新後の混乱も収まり、出版・印刷の発達と相まって、出雲漢詩壇は、江戸時代にまさる活況を呈するようになった。この気運の中で、『出雲名勝摘要』（明治十四年　一八八一刊）は生まれた。本書は、編者の星野文淑が、出雲地方の名勝をいくつか取り上げて、由緒を解説し、その地を詠んだ漢詩、和歌、俳諧を配したものである（多くは同時代の作品。江戸時代に溯るものもある）。更に、当時の出雲漢詩壇、歌壇、俳壇のそれぞれの巨頭、雨森精翁、中村守手、山内曲川の校閲を仰いでいる。彼らは単に名前を貸したのではなく、編輯段階で作品選択等の指導に相当関わったのではないかと、私は想像している。本書は、出雲の文学史のみならず、神話伝承、観光史、風俗史の資料として、貴重である。ところが、地方志等でまれに言及されるにすぎず、原文全体があまり読まれていないようなのを惜しみ、ここに翻刻を試みた。妹尾春江（詳細不明）による挿絵もすばらしく、いずれ本書を影印して、多くの人に見て頂きたいと考えている。

編者の星野文淑について、私の知るところは少ない。『島根県歴史人物事典』（山陰中央新報社　一九九七刊行）の星野成章（ほしの　せいしょう）の項を引く。

安政四年（一八五七）～明治二〇年（一八八七）教育者、「出雲史略」の著者

幼名を文淑（ふみとし）、雅号を鱸江（ろこう）という。松江で医

師をしていた文瑞の子。広島県師範学校をおえて帰郷。以後三保小学校訓導、木次小学校訓導となる。明治十三年（一八八〇）小学校の教科用として書かれた『出雲史略』を、翌年には『出雲名勝摘要』を出版した。教育者として郷土の文化向上に貢献したが三一歳の若さで没した。参考文献＝『大原郡誌』（坪内珠美氏担当）

なお、彼は、師である、出雲漢詩人（漢学者）内村鱸香（友輔・篤棐　一八二一～一九〇一）の還暦記念詩集『永錫集』（明治十五年　一八八二刊）も編輯している。内村鱸香の詩は本書にも掲載されている。（星野文淑の若死にを惜しむ碑銘も内村鱸香に撰せられている。『大原郡誌』一九七二刊、五一一頁）。当時の出雲地方において、文化界、教育界の一大コーディネーターであったろうことがうかがえる。

『出雲名勝摘要』は、本文の最初に「出雲名勝摘要巻之上」、版心にも「巻上」とあることから、おそらくは続刊の予定があったようだが、管見の及ぶ限りではそれらしきものを発見することができなかった。『山陰新聞』所載の本書の広告（例えば明治十五年十二月二日）にも巻分けや続刊の情報は記されていない。おそらく、星野文淑の体調悪化等により、続刊は断念されたのではないかと私は臆測している。

凡例

内容を正確に伝えることに重きをおき、字の配置や大きさなどのレイアウトは、原典を再現することに意を注がなかった。たとえば、小字二行注は、本文と同ポイント、同行にして（　）をつけて記した。版心には、序に連番、凡例には「例言」の二字、本文にまた連番が記されている。ページの変わり目に、それぞれ「序一オ」、「例言オ」、「一オ」のように、小字で注記を付した。便利のために、作品に連番をアラビア数字で振った（長歌と反歌はあわせて一作品とみなした。漢詩の序の部分は作品として数えなかった）。漢字の表記は常用漢字体を基本としたが、一部、要木の趣味により、旧体字のままにしているところがある。変体仮名は、現行の仮名に改めたが、清濁の別に自信がないので、濁点は施さず、原文のままとした。「トモ」の合体字や「事」の省略字等は、もとの字に戻した。【　】内に要木の説明や校訂を加えた。挿絵の存在も【　】内に記した。読みやすくするために、序、凡例、各名勝の由緒に句読点を付けた。漢詩文は原文に既にある読点を踏襲し、和歌、誹諧は分かち書きにした。和歌・誹諧の読みに関して、島根大学法文学部田中則雄教授にご指導を賜った。記して感謝申し上げる。

底本は、島根大学附属図書館郷土資料室蔵のテキストを用いた。翻刻を許可して下さった島根大学附属図書館に感謝申し上げる。底本の書誌は以下の通り。

出雲名勝摘要 ／星野文淑編輯
出版者　園山喜三右衛門
大きさ　31p；19cm
一般注記　1880.3
分　類　NDC8：291.73
本文言語　日本語
コード類　書誌ID＝1020736950

翻刻

【表紙題簽】
出雲名勝摘要

【表紙裏】
雨森精翁先生
中村守手大人　閲　　星野文淑　編
山内曲川宗匠

出雲名勝摘要

文会堂蔵

【序】
序[序一オ]

出雲名勝之多、不必讓畿甸諸国、而独地誌未全備、希世之蹟往々蕪没而不顕、可不惜乎哉。余嘗欲周遊一回、作書以資済勝之士、而為家累所羈、未暇也。有以待其人也、久矣。乃如星野文淑、則其人乎。文淑少有勝情、単身飄[序二ウ]然。凡霊境奥壤足能得造者、靡幽不探、靡深不窮。必徴之史冊、或参以故老之言、又教善画者作之図、且係焉以今古名人文詩、彙為若干冊、以便遊者、名曰、出雲名勝摘要。蓋亦地誌之亜也。頃文淑将録以公之、来請曰、先生以為可伝、則幸賜一言。余[序二オ]乃謂曰、善哉挙也。名勝待人而彰、人亦因名勝而伝。二者未始不相遇而済美也。今夫趙氏之璧、天下之至宝也。非和氏不能成其為宝、而和氏之名亦以璧遂聞天下。文淑為名勝之和氏也、多矣。其得名、亦将在此乎。盍速刻之。異日幸得畢昏嫁作鞵[序二ウ]之遊乎、請以此書為南針。雖然、我老矣。

明治十三年十一月
有所於帰村荘主人撰

【凡例。版心には例言とあり】
凡例[例言オ]

一本編ハ出雲国内ノ最モ著名ナル名所、古跡ヲ拾フモノナレトモ、未タ一二ノ漏脱ナキ能ハス。

一詩文、和歌、誹諧ハ総テ人ノ古今ヲ問ハス抜萃スト雖トモ、期ノ既ニ迫ルヲ以テ、亦未タ遺漏ノ憂ヲ免ル、能ハス。

一編中、毎題其由緒ヲ記シ、以テ看客ニ便ニスレトモ、其或ハ幾里町ト曰ヒ、或ハ何丈尺ト曰ヒ、或ハ幾何間ト曰フハ、皆是レ概算ニ[例言ウ]出ツルモノニシテ、敢テ精算ヲナスモノニアラサレハ、幸ニ之ヲ諒セヨ。

明治十四年一月　　編者誌

【本文】
出[一オ]雲名勝摘要巻之上

星野文淑　編

○千鳥城

一名ヲ亀田山城ト曰フ。松江殿町（島根郡）ニアリ。慶長十二年、堀尾吉晴月山城ヲ移ツシ、名クルニ此名ヲ以テス。山ヲ盾トシ渠ヲ幕トシテ、其要害ハ山陰ノ巨擘タリ。後チ京極氏、松平氏ヲ経テ、二百六十餘年（明治四年）ニ至タリ、藩主去ル。爾来修繕ヲ加フルモノナシ。

垣壁ハ[一ウ]為メニ壊レ、堡寨ハ為メニ崩レ、今ハ唯牙城ノ松間ニ屹立シテ、寒鴉ノ唖々ト晩靄ニ飛テ之ヲ守ルノミ。

1　中島樓隠

風壌竟帰神化敦、英雄割拠跡徒存、息兵猶足鍛鋼産、征利唯無煮海村、苔菜貢新十六島、城営尋古八重垣、富強別逞経綸術、不用書生越俎論、

【綸はもと倫に作る。今正す】

2　劉　石秋

魚膾堆盤白玉光、雲州酒冽割人腸、巨鱸三尺江[二オ]南美、駿馬千群冀北良、午笛舟迷橋柳影、春旗城掩渚花香、泮宮日暮経筵散、一路咏帰多乗黄、

【泮はもと洋に作る。今正す】

3　島　重養

亀田山　あふく大城は　松にのみ　残るもあはれ　萬代の声

4　武田道年

萬代の　亀田の山と　思ひしを　人たにすます　なりにける哉

5　北島三綱

【千鳥城図】[二ウ]

むれわたる　田鶴の羽風に　亀田山　城の辺の松も　千代よはふなり[三オ]

6　松井言正

萬代の　春は成にけり　亀田山　千鳥の大城　うちかすみつつ

7　松江　菊川

水湖に　山の尾を引　かすみかな

○大橋鱸網

橋ノ一名ヲ分郡橋ト曰フ。島根、意宇両郡ノ一大橋ニシテ、其長サ一町十二間、此処即チ碧雲湖脚ナリ。西望東眺、共ニ相ヒ宜シ。毎歳立冬ノ候ヲ最トシテ、橋辺ニ漁船数十艘ヲ繫キ、流ニ従テ、下ルトコロノ鱸ヲ網ス。腮ノ数四アリ。其味絶タ美ニシテ、恰モ支那ノ松江ノ鱸ノ如シ。故ニ此名夙ニ著ハル。

8　釈　道光

湖天飛霰日将晡、橋上行人粛々趨、漁父不知寒気甚、驚濤翻処網銀鱸、

9　釈　天鱗

枯蒲葉爛不籠烟、寒碧遙涵惨澹天、漁子豫知

【大橋鱸網図】[四オ]

風浪起、江心争杙捕鱸船、[四ウ]

10　内村鱸香

行舟稍遠泛群鳧、飄霰如珠撲荻蘆、昨夜寒風捲驚浪、漁人得意捕銀鱸、

11　杉　聴雨

秋風吹老松江水、知是鱸魚味方美、昨夜長竿有獲不、漁翁猶宿蘆花裏、

12　島　重養

大橋の　下ゆく波　よるとなく　昼も鱸の　幸やまつらむ【二句は、下ゆく波の、に作るべし】

13　別火千秋[五オ]

鱸とる　網さちおほみ　大橋を　過かてにして　人そ賑はふ【過かて、はもと、過のて、に作る。今正す】

14　長谷川龍衛

大橋の　なかき世かけて　曳く綱の　あみめもらさぬ　幸そ楽しき

15　武田道年

大橋の　鱸のあみや　ゆるむらん　あから嶋風　吹たちにけり

○立久恵

一名ヲ神亀峡ト曰フ。神門郡乙立村ニアリ。螺岩、烏帽子岩、猿岩、屏風岩、腰直岩等ノ巨岩聳立シテ、其高サ数十丈、幅凡ソ十町。老松[五ウ]

古杉、媚ヲ献シ、朝ニ水烟ヲ籠メテ、暮ニ雲雨ヲ籠ム。川ハ則チ神戸川ノ上流ニシテ、幅凡ソ二十間。一舟ヲ買フテ、流ニ溯レハ、其身ハ飄々乎トシテ塵世ノ外ニ出ツルヲ覚フ。

16　雨森老雨

使此勝与耶馬溪易地乎、海内第一之称、未必舎此而属彼、不幸僻在山陰畳嶂複嶺中済勝之士(六オ)罕至、是其名之所以不甚著、士之抱才学而所居不得其地者、不亦然乎、雖然、天造地設、渾沌未闢、其不失太古真気者、亦唯在此、不然、其不為羅漢寺者幾希乃安知其為不幸者之適非其幸乎哉、此中消息難与不知者道、

17　釈　道光

軽舟牽上峡雲西、環合奇峰望不斉、九曲渓流清且浅、幾多巌樹聳還低、歌謳更欲追朱子、応接恰同遊会稽、何日人間辞慣鬧、此中曳尾ト幽棲、

【立(六ウ七オ)久恵図】

18　山村勉斎(七ウ)

突兀峡頭雲外欹、誰図世有此神亀、崎嶇休嫌攀躋苦、猶勝塵塗不可随、

19　秋山光條

言巻（毛）文（尓）文（志支）言巻（毛）最（毛）奇（志支）白雲（毛）立（毛）及（婆須）天津日（乃）影（毛）隠（呂比）萬代（尓）神佐備立（留）立久恵（乃）峯（乃）巌群　千五百群　岩根撼　雷（乃）音響似（弖）落多藝知　瀧知流（留々）琴引（乃）美尾溯上　纜（乎）松（乃）下枝（尓）打掛（弖）遊（留）今日（波）現身（乃）世（共）覚（衣須）薦枕　高天原（乃）久方（乃）天乃川原（尓）何時来（尓）気牟

大空（尓）　麗（礼留）星（乃）　宿鴨　名（尓）立久恵（乃）

峯（乃）巌（波）

20　島　重養

谷川の　けしきもそへて　立久恵の　山は舟より　見へかりけり

21　島多豆夫

川舟の　もそろ〳〵に　のほりきて　立久恵山は　見るへかりけり

22　武田道年

立久恵(八ウ)の　腰のし岩に　のほりてそ　山のけしきは　見おろされける

23　北島三綱

岩畳　たゝみし世より　立崩(たちくゑ)て　苔もしみらに　神さひぬらん

○小勝間松

松江ノ西北一里餘、名分村（島根郡）小勝間山ニアリ。其大サ一丈七尺餘、高サ十二間、右ニ転スル事十七間、左ニ廻クル事十九間。神代ノ老松ニシテ、枝ノ大サモ亦八尺ニ下ラス。其垂下(九オ)シテ土ヲ穿チ、復タ躍リテ雲間ニ蟠マルモノ、大小合セテ十有三。鬱然ト独リ後凋ノ色ヲ呈シ、住吉、高砂ノ諸松ト其名ヲ競ヒ、名士雅客ノ之レヲ訪フモノ多シ。然ルニ中世枯死シテ、高蹤ヲ隠クスヲ以テ、小松其跡ヲ襲キ、今ヤ亦朝ニ孤烟ヲ籠メ、夕ニ乱雲ヲ鎖サスト雖トモ、未タ昔時ノ風致ヲ見ル能ハス。惜イ哉。【大サは当に太サ＝ふとさに作るべし。蟠はもと蹯に作る。今正す】

24　細野安恭

小勝間の　かけのたり尾の　したり松　神代な

【小勝間松図(九ウ十オ)】

からの　姿成らん(十ウ)

25　松井言正

小勝間は　みやも鳥居も　なけれ共　松こそ神の　しるし也けれ

26　武田道年

小勝間の　松はめくしも　少女子よ　なか家つとに　いさといはなん

○宍道湖

一名ヲ意宇湖、又碧雲湖ト曰フ。意宇、島根、秋鹿、楯縫、出雲ノ五郡ヲ以テ、之レヲ包メリ。長サ五里（十一オ）、幅一里餘、周回ハ十一里ニ下ラス。中ニアル一嶼ヲ夜雨島（嫁島）ト曰フ。老松数幹アリテ、神女ノ廟ヲ建ツ。西ニ屹ツ一峯ヲ石見ノ小媛山トシ、東ニ聳ユル一嶽ヲ伯耆ノ角盤山トス。皇国十二景ノ其一ニシテ、済勝ノ士ハ四時ヲ別タス、朝ニシテ舟ヲ泛ヘ、暮ニシテ棹ヲ停ム。

27　　頼　杏坪

松江日霽放軽航、四面雲山与水蒼、樹杪楼抽鴟尾小、波心橋臥蟒身長、此遊帰国為談柄、他

【宍道湖図】（十一ウ十二オ）

28 29 30　　釈　天鱗【鱗はもと麟に作る。今正す】

日思湖竟夢場、衰折自悲難再会、幾珠老涙迸斜陽、【珠はもと株に作る。今正す】

淡青濃緑画難摹、山水如斯天下無、長恨坡公生異域、枉教佳句属西湖、左右層巒列画図、直西只見碧波舗、浮空一抹何村樹、烟翠依微認却無、湖上寒威霽更添、銀濤乱走北風厳、夜来新下僊峯雪、削出雲間白一尖、

31　　松田淞雨

洵（十二オ）美非凡境、蓴鱸也可誇、暮帆争一港、秋水照千家、遠岳装軽雪、疎楓畳断霞、倚欄唫不尽、只惜夕陽斜、

32　　三島雲滙

汀烟破処露孤城、目送帰帆立晩晴、浅碧濃紅春遠近、夕陽三十六湾明、

33　　島　重養

漕つれし　宍道の海の　早舟は　あるゝ日なみも　時をたかへす

34　　松井言正

いさ清き（十三ウ）　宍道の湖に　てる月は　君か千年の　境也けり

35　　長谷川龍衛

佐比売山　大神山も　遠しろく　たかねうつせる　意宇の湖

36　　松江　梅圭

雲ぬける　月の勢ひや　猪道湖

○御井

出雲郡、下直江村、御井神社境外ニ三井アリ。一ハ方四尺、一ハ方五尺、一ハ方三尺ニシテ、共ニ井幹ナシ（十四オ）。唯藩籬ノ之レヲ繞クルノミ。神代、大己貴命、稲葉八上姫ヲ娶リ、結ノ里ニ於テ、木俣神ヲ産ム。是レハ則チ神ノ産湯井ナリ。実ニ霊水トイフヘシ。

37　　三島雲滙

神跡猶伝御井名、苔甃緑湿水盈々、荒垣今日無人補、立聴青蛙喚雨声、

38　　島　重養

木俣の　神の産湯の　むかしさへ　くみとる御井の　松の下水

【御井図】（十四ウ）

39　　島（十五オ）多豆夫

木俣に　かくれて蝉の　はふかけも　うつりて清し　御井の真清水

○陰陽石

秋鹿郡、古浦ニアリ。偖ニ天然ノ巨岩ニシテ、陽石ノ高サ一丈、海上ニアリ、陰石ノ高サ二丈、海岸ニアリテ、相ヒ対峙ス。其距ル事、凡ソ十間。北風岸ヲ打テ、水波鳴ル。陽石ノ下部ニ、海苔、貝殻ヲ纏ヒ、陰石ノ上部ニ、蘆葦、滴水ヲ帯フ。形状恰モ玉茎玉門ノ如シ。社アリテ伊

【陰陽石図】（十五ウ）

[十六オ]非諾、伊非冊ノ二尊ヲ祭ル。

40　　島　重養

おのつから　かゝる形ちも　なり〳〵て　なりあまる石　なりあはぬ石

41　　松江　曲川

浪にそふ　陰陽石や　初日かけ

○猪石

意宇郡、宍道村ニ二石アリ。一ハ長サ二丈七尺、高サ一丈、周回五丈七尺ニシテ、一ハ長サ二丈五尺、高サ八尺、周回四丈一尺ナリ。神代[十六ウ]【猪石図】大[十七オ]己貴命獵リセント欲シ、野ニ出テ、猪ヲ逐フ。其猪走リ逃ケ、佐為谷ニ至リ、化シテ石ト為ル。是レ即チ其石ナリ。形チ絶タ類似ス。村名ヲ宍道ト曰フハ、ソレコレニ由ルカ。

42　　島多豆夫

大神の　御狩のあとを　しのふれは　猪像なせる　石はありけり

43　　武田道年

八千矛の　神のおはし、　し、かたは　今も宍道の　郷に残れり

44　　島[十七ウ]　重養

大神の　御狩におちて　猪石は　佐為谷に社　たちひそみけれ

○月山城墟

山ノ古名ヲ勝日山ト曰フ。能儀郡、冨田村ニアリ。往昔、平景清ノ築クトコロニシテ、建武中、塩冶高貞之レニ居ル。文明ノ頃、尼子経久勃興シテ之ニ拠リ、竟ニ中国ニ雄視セリ。永禄年間ニ至リ、晴久、義久、毛利氏ノ囲ヲ受クト雖トモ、堅城利兵ニシテ、能ク七年ノ久キニ[十八オ]耐フ。其後チ年ヲ経テ、堀尾氏ニ至リ、之レヲ島根郡、末次ニ移ツス。満山皆楓樹ニシテ、爛然ト霜ニ飽ク。其色渥丹ノ如シ。故ニ高秋ニ至レハ、名士ノ之レヲ探クルモノ多シ。

45　　島　重養

子規　鳴てふ冨田の　月山は　花に雪にも　名くはしき哉

46　　北島三綱

いにしへの　旗手もかくや　靡きけん　月やまさくら　あらし吹なり

【月山城墟図】[十八ウ]

47　　島[十九オ]多豆夫

勝日山　勝声あけし　たゝかひの　昔をそおもふ　弓はりの月

48　　武田道年

冨田山の　昔をとへは　武士の　月にあそひし　跡そ残れる

49　　長谷川龍衛

たゝかひし　太刀の光と　さゆるかな　勝日の峯の　秋のよのつき

50　　北島　湊

もの、ふの　花と散しは　むかしにて　月山さくら　嵐ふく也[十九ウ]

51　　細野安恭

春過て　花も匂はぬ　月山に　古き昔を　よふ千鳥哉

52　　安来　芋村

その声や　さすか吐月の　郭公

53　　松江　百喜

月山も　花の七日の　くもりかな

○犬石

意[二十オ]宇郡、白石村ニアリ。長サ一丈、高サ四尺、周回一丈九尺ノ石ニシテ、大己貴命猪ヲ逐フ時、率ユルトコロノ犬ハ則チ是レナリ。今日ニアリテ、猶ホ其形ヲ損セス。廻ラスニ石垣ヲ以テス。

54　　島　重養

大神の　御狩の幸を　かゝふりて　犬はときはの　石となりけむ

55　　北島三綱

猪おひて　石となりけん　犬像の　いはほそ里

【犬石図】（二十ウ）

の（二十一オ）　まもり也ける

○潜戸

島根郡、加賀浦、神崎ニアリ。窟門高サ四間、広サ二間乃至八間、長サ凡ソ二町許リ。一洞アリテ北ニ向フ。抑此窟ヤ、太古、支佐加比比売命ノ佐太大神ヲ産ムトコロニシテ、啻北方ノ一洞アリテ、窟内常ニ黯々焉、大神之レヲ厭ヘ、金弓ヲトリ、一射シテ、西ヨリ東ニ通ス。於是、窟内為メニ耀ク。是レ即チ今ノ東西両門ナリ。社ヲ建テゝ、支佐加比比売命ヲ祭ル。

56　　川（二十一ウ）勝重綾

出雲のや　加賀のみ嵜の　奇しきや　くきとのみ戸は　常暗に　闇き岩屋と　麻須羅神　投矢射放ち　其岩を　通しましきと　茜刺　東門より　西門にし　い行むかへは　そともなる　北の大門そ　はしめより　龍ありけらし　大海原　八重なる波は　雲井なす　澳にひろこり　壁立てる　岩穂にくたけ　うつろなる　北窟戸も　たゝゆりに　ゆりかくやすと　おもふまて　聞のかしこく　現にし　見のあやしく　千早振　神のみあとと（二十二オ）　語継き　いいつくなへに　出雲人の　吾にかたらく　つら〳〵に　いにしへおもへは　天なるや　吉佐貝比比咩の　大名持　神のみことの　現身を　ひたしいかすと　けたしくも　こゝに来まして　八十神を　避てましけん　あとゝころ　かくこそあれと　つはらかに　かたるをきけは　うへしこそ　八洲の国の　国中とも　おもほえなくも　現世に　こゝたさかりて　あやしくも　神さひたてれ　是の神崎

くきとより　吾漕来れは　まかみふる　妹

【潜戸図】（二十一ウ二十三オ）

か（二十三ウ）　櫛島　波のまにみゆ

57　　長谷川龍衛

黄金弓　とらしゝ世より　やみ〳〵に　みいつかかやく　かゝの神崎

【とらしゝ世より、は、もと、とらした世より、に作る。今正す】

58　　島多豆夫

射放ちし　こかねの弓の　ひかりにや　くらき岩屋も　かゝやきにけむ

59　　松井言正

千早振　神代もかくや　霞けむ　くきとの沖の　春の曙

60　　松江（二十四オ）　也丈

乳岩は　涼し寝た子も　眼をさませ

○鬼の舌ふるひ

地ハ仁多郡、上三成村ニアリ。神世ノ時、鰐魚、阿井村ニアル玉姫命ヲ恋フテ、上リ来ル。命石ヲ以テ其流ヲ塞テ会セス。鰐大ニ怒リ、其舌ヲ振フ。故ニ此名アリ。高サ数十丈ノ断巌屹立シテ、屏風石アリ、畳石アリ、亀石、甑石アリ。大石、碧潭ヲ出テゝ、恰モ馬ノ浴シ起テ鬣ヲ振ハントスルカ如シ。遊ヲ好ムノ士、一タ

【鬼の舌ふるひ図】（二十四ウ二十五オ）

ヒ（二十五ウ）　此ニ至レハ、悠然トシテ出塵ノ想ヲナス。

61　　田能村直入

62

63

64

嶮路危巌何足愁、我元林下旧樵儔、老来偏喜多天幸、又遇渓山錦繡秋、

半日渓辺去又来、両山絶壁合還開、自歓墨客胸中曠、収得幾多丘壑回、
老楓安分在深山、人跡疎辺占静間、却怪春情猶未忘、也逢青女発紅顔、
巌腰紅葉枕渓流、眠月臥雲霜露秋、山色粧来如有待、不知山色待吾不、
65　別 火千秋（二十六オ）

かしこみし　鬼もありけん　岩山も　心やすけに　かよふ猿かな
66　松江　曲川

雪なたれ　何処や鬼の　舌ふるひ

○出雲赤壁

勝ハ国ノ東北端ニアル雲津浦（島根郡）ノ海岸ナリ。断巌絶壁、高サ数十丈。其色赭黒ニシテ、凡ソ二十町ニ度タル。松アリテ、葱々岩ニ倚テ眠リ、瀧アリテ、轟々石ヲ衝テ砕ケ、間〳〵鳥声

【出雲赤壁図】（二十六ウ二十七オ）

ヲ聞キ、会〳〵魚ノ躍ルヲ見ル。瀧ノ名ヲ尾野戸ト曰フ。高サ五間餘、幅一間有半。北風吹来リ、水波ハ稍〳〵興ルト雖トモ、亦当サニ中秋舟ヲ泛フルノ行アルヘシ。（二十七ウ）

67　松田淞雨

江風山月満孤舟、斗酒鱸魚好此遊、一起髯蘇重著筆、雲州未肯譲黄州、

68　吉岡敬勝

焼立し　船のけふりも　忍ふまて　春は霞める　波の上かな

○佐々木高綱墓（二十八オ）

松江ヲ距ル西南数町、乃木村（意宇郡）、善光寺境内ニアリ。円塔一基、高サ一丈、傍ラニ石燈八箇、老松三幹アリ。廻ラスニ垣ヲ以テス。法名ヲ心瀧院殿法嶺源性大居士ト曰フ。佐々木秀義ノ第四子ナリ。源頼朝ニ従ヒ、元暦元年、宇治川ノ役先登第一ノ功名ヲ挙ク。頼朝ノ薨後、世ヲ遁レテ南都ニ赴キ、竟ニ西国ヲ周クリ、建保四年二月十五日ヲ以テ卒ス。年七十五。

【佐々木高綱墓図】（二十八ウ）

69　松田淞雨（二十九オ）

奮然叱馬蹴奔瀧、便見西軍勢已降、苑水流芳千歳下、誰図埋骨在松江、
70　三島雲滙

先登功績去無蹤、抔土空餘三尺封、一霎寒声白楊雨、似聞苑水叱驕龍、
71　松江　可物

もの、ふの　跡訪ふ露の　光かな

○龍頭瀧

松笠村（飯石郡）、鳥屋丸山中ノ瀧、是レナリ。高サ数十丈、幅凡ソ十間。下ニ淵潭アリ。奇巌怪石聳立シテ、蛟龍ノ飛ハント欲スル形状ヲナス。古木ノ葱々ト起臥スルハ、恰モ龍ノ鬚髯ヲ垂ル、カ如ク、口頭ノ深々ト白霧ヲ籠ムルハ、恰モ龍ノ雲霓ヲ起コスカ如シ。其声雷霆ニ異ナラス。一遊之レヲ眺メハ、光景佳絶ニシテ、人ヲシテ塵外ノ想ヲナサシム。（二十九ウ三十オ）

72
73　清水南山

龍澄在吾雲之松笠村、去松江十三里。巉巌絶壁、相環如屏風。斯処即洞也。洞中東西四五十歩。西崖掛瀑布。去崖上一丈餘、有突巌。瀑水激之砕如絲、咆哮鳴響如雷。土人曰、西国第一名瀑布。実絶奇也。瀑水飛下三十三尋云。事見風土記。（三十一オ）

峭壁高懸一派垂、飛烟走碧気凄其、請看三十三尋練、砕作千条万緒絲、
一回来看一回宜、二度看来二度奇、欲画不成詩不到、瀑前把筆立多時、
74　島　重養

松笠を　さしてきつれは　雨ならて　ぬる、袂や　瀧の白浪（三十一ウ）

75　松井言正　藤井猪之助
瀧の糸は　真菅のみのと　みゆる哉　千よをいたゝく　松笠の山　小西宗十郎
76　北島三綱　足立
ながらへて　われも千歳を　松笠の　瀧のしら糸　来てやむすはん　今井兼文
【初句「が」の濁点は原本にあり】　村上斎次郎
高島晋太郎
遠藤文九郎

妹尾春江画

出雲名勝摘要巻之上　終

【奥付】
明治十三年三月五日版権免許
同　十四年六月刻成出版
編輯人　島根県平民
星野文淑
出雲国島根郡西茶町六百八十八番地
出版人　同
園山喜三右衛門
同国意宇郡本町五番地
売弘所　川岡清助
一年舎
稲吉吉蔵
有田伝助
西尾佐助
飯塚宗三郎
石原伝吉

本翻刻は、
島根大学法文学部山陰研究センター　山陰研究プロジェクト1003
山陰地域文学・歴史関係資料の研究（2010－2012年度　代表　要木純一）
による成果の一部である。

“Izumo meisyo tekiyo”: reprint and introduction

YOGI Junichi
(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

〔Abstract〕

“Izumo meisyo tekiyo” owned by Shimane University Library was published in 1881 in Matsue city. On this book we can see Kanshi, Waka, Haiku poems about the noted places of Izumo district. Most of them were made by famous poets who lived in Izumo district in early Meiji era. This is reprinting the book.

Keywords : Izumo meisyo tekiyo, Hoshino Humitosi, sightseeing, early Meiji Era, Kanshi poem